

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです
経営者として、絶対に手放したくなかった社員とは？

仕事ができる社員、できない社員はどこが違うのか—？

たとえば、仕事ができる社員は、「早く失敗に気づく」ことの重要性をわかっています。だから、判断することや、行動することをためらいません。走り始めてみて、もし何かうまくいかないことがあれば、そこで軌道修正すればいい、と考えます。もし、何かミスがあったとしても、早い段階でそれに気づけば、すぐに挽回することができます。ミスを小さな芽のうちに摘むことができるわけです。そのほうが、結果として効率の面でも、コストの面でも、また完成度の面でも望ましい結果が出るということを、仕事ができる社員はわかっています。

逆に、仕事ができない社員は「早く失敗に気づく」ことの重要性をわかりません。だから、ダラダラといつまでも判断や行動を先延ばしし、何をするにも時間がかかります。時間がかかるということは、労力もお金もかかるということです。そういったコスト意識がなく、何かミスが起きたときには、すでに取り返しのできない事態になっていたりするので

また、仕事ができる社員は、あらゆる仕事に「デッドライン」を設定します。「いつまでに何をやるか」を明確に決めて、それに従って効率的に、集中的に仕事を進めます。この「デッドライン」があるかないかは、仕事の結果を直接的に左右します。なぜなら、人間は弱いもので、易きに流れる性質を持っているからです。「デッドライン」が決まっていなくて、なかなか集中できず、ダラダラと仕事をしてしまうという危機感を、仕事ができる社員は持っています。だから、自分に対して積極的に「デッドライン」を課します。そうやって仕事力を磨いていくのです。

一方、仕事ができない社員は「デッドライン」が曖昧です。そのためにダラダラと仕事をします。そして仕事が後手後手に回り、時間に追い立てられることとなります。だから、定時に仕事が終わらず残業する結果となり、睡眠時間も短くなり、翌日は頭も体調も冴えないために仕事の効率が上がらず、さらに追い立てられていくのです。まさに悪循環です。さらにハングリー精神に満ちていることも、仕事ができる社員の条件です。ハングリー精神がある人は、目の前の仕事から様々なことを貪欲に学びます。そして自らの能力を磨いていくと同時に、「人の上に立つ」ための資質を身につけていきます。その結果、会社での地位が上がっていきますから、給料の面でも、仕事ができない社員との差をますます広げていくのです。

このように、これから本書で述べていく話は、机上の空論ではありません。私が長年、ビジネスの世界で自ら実践してきたことであり、また、トリンプ・インターナショナル・ジャパンという会社で、19 年間にわたって経営者として接してきた多くの社員の中でも、「この社員は絶対に手放したくない」と思う社員たちが実践していたことです。本書では、そのことを余すところなく紹介していくつもりです。

考え方や能力、習慣、仕事への取り組み方など、様々な角度から、仕事ができる社員、できない社員はどこが違うのか—その分岐点を挙げて、ではどうすれば仕事ができる社員になれるのか—その方法も述べていきたいと思います。経営者や管理職の方から若いビジネスマンにまで、本書が、よりよい仕事をするためのヒントやきっかけとなれば、これに勝る喜びはありません。

仕事ができる社員とできない社員は、何の重要性が分かる、分からないと筆者は言っていますか？

()